

『公民館』一九六五年二月（全国公民館連絡協議会）

## 公民館活動と調査 《第一回》

### ― 調査には哲学が必要である ―

矢 口 新

フィルム学級を開催するということを思いつくとする。思いついた人はそれを白紙の状態から突然思いつくことはまずあるまい。だれかに聞いたか、書物か雑誌で読んだからであろう。

もし、独創的に全くだれからも教えられずに思いついたとしたら、それはフィルム以外の方法で学級が何かをやった経験があつて、その経験に照らしてみて、それらがあまり効果がないと考えたか、あるいはより効果のある方法はないかと考えてそこから思いついたのであろう。しかし、フィルムというようなことを思いつくはそれについてなんらかの経験があつて、その効果が高いことを認めていたことが思いつく原因になつてゐるであらう。

このように考えてみると、何かを思いつくといつても、そこにはそれだけの原因があるので

あつて、突如として全くなんの必然性もなしに生まれてくるのではない。生まれるには生まれるだけの地盤があるのである。それは思いつく人、つまり何かやろうとする人の、それに至るまでの経歴がある、ということである。

同じフィルム学級といつても、それをやる人が、どういう人であるか、どういう考えをもっている人か、どこからその考えをもってきたかによつて、実際にやることはちがってくる。かりにその人が何か雑誌で読んで、自分のつもりでは全く同じように真似をしてやつたとしても、それでもよそで行なわれたと全く同じであることはない。具体的な事実にはさまざまちがいがあるのである。人間のやることに全く同じことは二つはない。一回限りである。第一にいかにもそのとおりに真似をしようとしても、全く同じように真似をすることはできない。やっぱり自分のやり方が出るのである。それは、そ

の人が人間であつて、多少とも自分の考えをもつならばどうしても当り前のことといわなければならぬ。

さらにもつと實際的に考えると、かりにある人が、どこかよそで行なわれたフィルム学級のそつくりをそのまままねをしようとしても、今度は相手が違うから相手が必ずしもそのように真似をしてくれない。やはり同じ現実とは二つないのである。それが人間の生活の姿なのである。

さて、なぜこんなことをいうかというところ、何が行なわれるときは、必ずそれが生まれる現実という地盤があるのであつて、現実から生まれてこないものはないということを考えてみたかつたからである。それは何かを行なう人つまりやる人が、現実というものを意識しないでもやはり同じである。意識すればやることはもちろん現実から生まれることにはちがいが、意識しないで、自分では全くそんな自分のまわりの現実を考えないつもりでも、自分自身が現実の一部であつて、それが自分のやることをきめさせているのである。

### 二

調査ということ、何かある一つの技術として考えない人がいる。調査をすれば何かかわかると考えて、調査によつて何かを生み出そうと考へている。そういう調査には一つのきまつた

方法があつて、その方法にしたがえば自然にも  
 のことがわかつてくると考えている。しかし、  
 こういう考え方は根本においてまちがつてい  
 る。調査というのは、そういうものではないの  
 である。

よく私に聞く人がある。これこれのことをし  
 たいと思いますが、その前に調査をしたいと思  
 うが、どういふ調査をやつたらよいでしょうな  
 どという。こういう考え方は根本的にまちがつ  
 ている。私の行くところはどこでしょうとか、  
 私はどこへ行つたらよいでしょうと人に聞く  
 ようなものである。

調査というのは、自分のまわりの現実——自  
 分自身を含めて——を自覚して、必然的に何が  
 つぎにおこるべきものなのかを自分で発見し  
 ようとすることなのである。

はじめに言つたこと、つまり自分では何も現実  
 のことを意識せず、全く人から聞いた話をそつ  
 くり真似してやつているつもりでも、それも実  
 は現実の中の自分がやつていることなのであ  
 る、ということをもう一度よく考えてみる必要  
 がある。だれか人から話を聞いて、それはよい  
 ことだと思つたとしても、それはある現実の中  
 で生活している自分の受けとり方で、ちがつた  
 現実の中で生活しているちがつた人が聞けば、  
 ちがつた聞きとり方をするのである。もうそこ  
 に現実が働いているのである。何かをやるう、

真似をしてやるうというのは、自分をとりまく  
 現実があつて、それが自分を通して、あらわれ  
 ているのである。自分は自分なりに現実をみて  
 いるから、それが人の話をもつともだと受けと  
 るのである。フィルム学級をこうしてやつたら、  
 大変効果がありましたという話を聞くと、そう  
 だろう、それにちがいない、自分もそうしよ  
 うと思うのは、自分が現実をそう見ているからで  
 ある。人の話に納得するのは、その話に身を  
 つまされるからである。つまり、自分がそう思  
 っているからである。人間は、自分のもっている  
 もので他人の話を受けとっているものであつて、  
 それ以上のものを受けとることはできないの  
 が常である。

自分がそう思っているというのは、現実が自  
 分という眼鏡を通して、そこに姿をあらわして  
 いるのである。ということは、自分の現実の見  
 方が甘ければ甘いなりに、それだけの現実しか  
 姿を表わさないとことである。深ければ深  
 いなりに、それだけ現実が姿をあらわしている  
 ということである。

三

もう少し別の例を考えてみよう。公民館報を  
 出すとする。だれに読んでもらうかと考えて出  
 す。そのときに、民衆というものはこういう程  
 度だから、こう書いてやれば、読んでくれるだ

ろうというようなことを考えてつくる人もい  
 る。そんなことは考えないで、——全く考えな  
 い人はいないかも知れないが、比較的にいって  
 ほとんど考えないで——どこかよそでやってい  
 るのをそっくりまねしている人もいるかもし  
 れない。考えている人はそれなりに現実を考え  
 ているということはわかるが、考えないでや  
 っている人も、結局は現実を、それなりに受けと  
 っているのである。つまり、その地域の人がど  
 ういふ人かを考えないということは、よその土  
 地とその土地のひとがたいしてちがわないと  
 考えているのである。

地域の人々の意向をくみとることを考えな  
 いという態度で、その地域の人間はどうである  
 かということ把握しているのである。つまり  
 人間にはたいしてちがいが無いという態度を  
 もっているのである。意識していないとしても  
 その人の考え方はそうなのである。意識しない  
 けれども、地域の人々の意向をくみとることの  
 必要性を認めていないのである。あるいはそう  
 いふものをくみとることができなくて、ただ漠  
 然と人間というものはこういうものだとい  
 うことを考えている人なのである。

しかし人間はそう簡単にこうだといひ切れ  
 るであらうか。なかなかそんな単純なものでは  
 なく、無限にくみつくせないものをもっている  
 のである。そこで、くみつくすという努力は常

に必要になってくるのであるが、それと裏腹に人間を甘くみている人は、だれでも人間にはかわりないから、よその土地で成功したことは自分の土地でも成功すると考えている。それはあさはかなのである。

#### 四

こうして調査をするというのは、われわれが何かことをしようとして、惰性でなく、自覚的にしようとするれば必ず必要なことなのである。この場合調査というのは、何も紙に質問のようなことを書いて、これを人に渡して書いてもらうといった形のことをいっているのではない。端的にいえば、現実を自覚的にみるということである。

われわれは、惰性になっていく仕事がある。日常茶飯事といわれる事柄はことごとくいつてよいほど習慣的に行なっている。そういうことまで一つ一つ考えて、自覚してやっていたのでは毎日の生活行動は成立しないから、それはそれでよいのである。しかし、それがときには行きづまりとなつてわれわれの前にあらわれてくることもある。それは何か新しい問題となつてあらわれてくることもある。なんとなく全体の関係が具合がわるくなつて、どこにその原因があるのかをさぐってみなくてはならないことがある。きわめて漠然とはあるが具合

がわるくなつたという感じをもつことがある。そうすると自分の日常行動を反省し直して、あらためて筋を通してみるというようなことをやる。こういうのは一種の調査である。

見るとか調査とかというのは、惰性をうちやぶる行動としてあるのであつて、自分の行動（それは社会という自分であつてもよい）を一度整理することなのである。このことははっきりしてないと、形だけの調査が行なわれて結局何もしないと同じことになる。

文部省で行なつていく社会教育の調査というのがある。学校基本統計に類するものであるが、こういうものはある意味で一種のしきたりとなつて行われているものである。毎年行なわれて——社会教育調査は毎年行なわれていないが、学校基本調査は例年行なわれている。——毎年公民館の数とか、主事の数とかが出されている。これは調査という見る活動が一種の習慣として社会的に固定しているのである。こういうのを見ていると、調査というのは、いろいろなものを出すものだというように考える人もあろう。ものの数を数えるなどというのはきわめて単純なことであるから、そこには、自覚的にみるというような考え方がないかのようには思われる。しかも、それが習慣的に行なわれるとますますその印象を強くし、調査というのはあまり役に立たないことだというような

考え方も出てくるというものである。

#### 五

しかし調査というのは、ある人が、自分自身を自覚的にながめているものであるという見方で、学校基本調査や社会教育調査をみると、やはりそこにはっきりした意味がある。それは国という立場に立つて、ある人が国全体の様子をながめているのである。国が公民館や学校に対して金を使うという仕事をしているならば、それをただ去年もこうだから今年もこれだけ出すということではなく、全体として国という自分は何をやっているのかを自覚してみるということは必要になってくる。そこに、ただの惰性に従つて仕事をするという以上のものがある。

立場のちがう市町村の人がみると、あまり役に立たない。しかし、市町村の人でも国の立場に立つて物を見るときは、役に立つのである。同じものでも見る人の立場によつてちがったように見えるのである。

このことは、物を見る、調査をするには、それを見たり、調査したりする人が非常に重要な役割を果たすということである。人の立場といたつたほうがよいかもしれない。調査をするには、自分がどういう立場に立つて、何をしてきたのか、これから何をしようとしているのか、そう

いうことを反省することが調査のもとなのである。だれかよそから調査の上手な人をつれてきて、やってもらおうという場合には本当はゆかないのである。調査をたのまれた人は、頼んだ人のつもりになってやるけれども、しかし、どうしても同じ人にはなれないわけだから、頼んだ人の考える調査をやることはできない。調査というのは自分がやらなくてはならない。自分のみが、自分を反省することができるのである。自分というのを市町村といってもよい。市町村が市町村自体の活動を自覚しようとするのが調査だといえる。つまり、ある仕事をしている人が、その仕事を自覚してみることが調査なのである。

## 六

社会の要求を調査するなどということがよくいわれる。人々の考え方を聞くなどということもよくいわれる。こういういい方は、これまでに私が述べてきた、調査とは仕事をする主体がその仕事を自覚するのだといういい方と非常にちがうように見える。しかし、本当は同じことなのである。

きわめて卑近な例をあげる。赤ん坊が泣いている。お母さんはいたいそれかどうかという要求かを本能的に知っているからオツパイを飲ませるといったことをする。オムツをとりかえて

やることもある。それはもう惰性といってもよいほど習慣的になっている。しかし、オツパイを飲ませて泣きやまないこともあると、ハテナと思う。病気かしらと思うことがある。そうすると、もっとくわしく見なくてはならないことになる。赤ん坊の状態、自分のやったことを一々検討し直さなくてはならぬ。そして、医者へつれていって見てもらうというようなことをする。しかし、医者にも本当はよくわからないうこともある。病気であるということがわかっていたら、病気ならば発見するけれども、病気でないものは発見できない。少し大きい子どもになれば、お菓子がほしいから泣くということもある。そういうことならば、これは母親が発見しなくてはならない。

つまり子どもの要求を知るといえるのは、その場の構造をよく知っている母親がまずよく知ることができるのである。それを知るのは、その母親と子供の関係のあり方を一度検討し直し、見直すこと、つまり調査によって知るのである。やはり、そこに主体的に何かをしようとする人が、自分のやっていることを含めて、その現実を見直すことによって、現実がわかり、つぎに何をしたらよいかかわるのである。

## 七

調査は、調査する主体から出発するというこ

とを忘れてはならない。社会の要求を多くというのには、お前は何かほしいかと子供に聞くことではない。そうすれば子供はお菓子がほしいと答えるであろう。それで調査が終わったのでなく、そう答えたからといって、本気にそうだと思つて、お菓子ばかりやっていたら、子どもはおなかをこわしてしまつたら。これはおなかですいたことなのだなという結論を出すのは調査の主体であるが、それはただ、相手に聞くから出てくるのでなく、こちらが現実を見直すという態度をもっているから、正しい結論があるのである。

調査は調査する主体が、主体的に、自分を含めて、現実を反省しようとするところから生まれてくるのである。現実を反省しようというのは、これまでの惰性で物事を処理できなくなつたときである。惰性を破ろうとしたときである。惰性をやぶろうとする構えがない時には、調査をやつてもはじまらないし、そもそも調査ははじまらないであろう。調査は形式ではないのである。

—— 未完 ——

\*ライブラリー編集部より

元の稿には、「一回」の記述はないが、この後、二回〜四回までの稿があるため、連続したものであることがわかるように挿入した。